

青を見る—美的知覚の問題

松崎 俊之

Seeing Blue: The Problem of Aesthetic Perception

Toshiyuki MATSUZAKI

0 はじめに

最初に本稿のタイトルについて一言コメントしておくならば、この「青を見る (Seeing Blue)」というタイトルは、実は、イギリスの心理学者ニコラス・ハンフリーの著書のタイトル「赤を見る (Seeing Red)」の振りである（それではなぜ「赤」をわざわざ「青」に変えたのか、その種明かしは後段でおこなわれる）。

ハンフリーは、この『赤を見る』(Humphrey [2006])において、心理学者としての豊かな経験と進化生物学のさまざまな知見をもとに⁽¹⁾、われわれの感覚と知覚に関してきわめて大胆な仮説を提出するのだが⁽²⁾、本稿の狙いは、本書におけるハンフリーの所論の検討をとおして、その延長線上で美的知覚 (aesthetic perception) に関して考察を繰り広げることにある（本書の中心テーマをなすのは「われわれの意識はいかなる存在意義を有するのか」という問題なのであるが、この点については遺憾ながら今回は詳しく論ずることができないことを最初にお断りしておく）。

この狙いに沿うかたちで、本稿は第一部と第二部に大きく二分されることになるが、第一部では『赤を見る』において開陳されるハンフリーの感覚と知覚をめぐる議論が批判的に再構成され、続く第二部では第一部で得られた知見をもとに美的知覚の諸特性が解明されることになる。

1 感覚と知覚

以下の議論を具体例に即して展開することで、その理解をより容易なものとするために、ここでまず

ひとつの想定をおこなおう。それは、いまわれわれが青い色に塗られた矩形のパネルを眼にしているとの想定である。眼前に置かれた青い色に塗られた矩形のパネルを眺めるとき、われわれのうちに間違いなく何かが出来ることになるが、それこそまさに「青を見る」という経験に他ならない（以下では、この「青を見る」という経験の主体を仮にSと呼ぶことにする）。

1.1 「青を見る」という事実

青い色に塗られた矩形のパネルを眼にしているという、想定上のいまこの状況における基本的事実を確認しておくならば、それは以下の三種のものに大きく分けられることになる (cf. 10-12/16-18)⁽³⁾。

(1)客観的・非個人的事実 (objective-impersonal fact)

矩形のパネルが青く塗られているということ。換言するならば、パネルが460~480ナノメートル⁽⁴⁾の波長をもつ光を反射しているということ。これは測光器のような物理的計測装置で確かめることのできる客観的・非個人的事実である。

(2)客観的・個人的事実 (objective-personal fact)

Sが「青を見る」ときに、Sの脳内で生じている一連の事柄も客観的事実である。たしかに現在の技術水準では不可能だが、原理的にはこの事実も物理的計測装置で確かめることができる。しかしながら、Sが「青を見る」という事実は、Sが現にここにおいて、しかも目を開いていればこそその事実であるかぎりにおいて、これはあくまでSの個人的事実にとどまる。

ハンフリーが明示的に挙げるのはこの二種の事実だけであるが、「青を見る」という経験にはさらに

つぎの第三の事実が深く関わっているものと考えられる。

(3)主観的・個人的事実 (subjective-personal fact)

Sが「青を見る」とき、Sは他に還元しようのない独自の質感をもった「青さ」を感じず。Sの感じているこの「青さ」、すなわちある特定の「視覚的クオリア (visual qualia)」⁽⁶⁾は、いかなる物理的計測装置を用いようと客観的には計測しえない主観的な事実であり、それはあくまでSの個人的事実にとどまる。

以上のことから明らかなように、「青を見る」とは、客観的でありながらも同時に主観的でもあるという意味で（主観的であるのは(3)の事実のみであるという点は、銘記しておく必要がある）、きわめて特殊な部類の事実⁽⁷⁾に属するものと言えるのである。

1.2 命題的成分と現象的成分

ハンフリーの指摘にしたがうならば、「青を見る」というSの経験には、二つの異なった成分、すなわち命題的な成分と現象的な成分が含まれることになる（12-14/19-20）。

(1)命題的な成分 (propositional component)

Sは、見るという行為の過程で、事物がいかなる状態にあるかを表象 (represent) するようになる。換言するならば、Sは実状についての「信念 (belief)」や「意見 (opinion)」や「感情 (feeling)」といったさまざまな観念 (ideas) を得ることになるのである⁽⁸⁾。これらの観念のうちには、外界についての非個人的な事実⁽⁹⁾にまつわるものもあれば、内界、すなわちSの内部で展開する「見る」という過程そのものについての個人的な事実⁽¹⁰⁾にまつわるものもある。ここでは経験の主体としてのSはあくまでたんなる観察者 (傍観者) にとどまる。

ここでひとつ重要な補足説明を加えておくと、ハンフリーの言う命題的な成分は、必然的に「何かについて (about)」のものであり、したがって、それは志向性 (intentionality) をもつことになる。たとえば、Sの抱く「パネルは青く塗られている」という信念は、「パネルが青く塗られている」という事態について (about) のものであり、

この事態を志向している (intend) ののである⁽⁷⁾。

(2)現象的な成分 (phenomenal component)

他方で、Sは見るという行為の過程において「現象的意識 (phenomenal consciousness)」の状態をも生じさせる。すなわちSは、他に還元しようのない際立った質感をともなった視覚的感覚、すなわち「視覚的クオリア」を生み出すのである。ここではSは能動的な作り手としてあり、たんなる観察者 (傍観者) ではなく、その感覚こそがS自身であり、他ならぬSの主体性の核心 (essence) をなすことになる。しかしながらその感覚は「何かについて」のものではなく、したがって、それは志向性をもたない⁽⁸⁾。

1.3 「青すること」

Sは、パネルを眺めるとき、青い感覚を経験していると自らが呼ぶような特殊な意識の状態を生み出すのであるが (14/20)、この意識の状態は、パネルにまつわる客観的かつ非個人的事実と対等の事実としてある (14/22)。青い感覚をもつことは、青い色によって刺激されることへの能動的で一人称的な反応 (an active first-person response) なのである (15/22)。

赤い感覚をもつことをハンフリーが「赤すること (redding)」と名づけていることに倣って、Sのおこなっているこの行為をここでは「青すること (blueing)」と名づけ、それによってその能動性を際立たせるならば (15/22)、この「青すること」は、この瞬間に自分が他ならぬ自分であるというSの経験の核をなすものと言えるが、しかしSは自分がなしているこの行為を完全なかたちで言語化することはできない (16/22)。

1.4 青の感覚

ハンフリーによれば、感覚は物理的事実として網膜上に存在する像のたんなるコピーでは断じてない。なぜなら「青すること」という感覚は、網膜像そのものがもち得ないような質 (quality) と誘引力 (valency) (一言で言うならば、ある特定のクオリア) を備えているからである。感覚は目で受け

る青い光だけではなく、この刺激とSとの相互作用をも表象 (represent) する。そのためSは、その感覚が自分にとって重要であると感じ、それに注目することになる (19/25)。

一般に色彩はそれを見る者の内にさまざまな「情動的・興発的反應 (emotional-affective response)」⁽⁹⁾を引き起こすことになるが、こうした反応は、色を帯びた光が主体のなかに引き起こす感覚の質に対応するものであって、何らかの物体が色のついた表面を現にもっているという事実に対応するものではない。この点を本稿における想定に即して述べるならば、青く塗られたパネルを見ることでSの内に引き起こされたある特定の情動的・興発的反應に対応するのは、あくまで「青すること」というS自身の現象的経験 (phenomenal experience) なのであって、パネルが青く塗られているという事実ではないということになる (21/27)。

1.5 青の知覚

目下の想定上の状況においてSは、もし求められたとするならば、自分がいま現におこなっている青の知覚に関して、たとえば以下のような報告をおこなうであろう。「私が立っている場所から2メートルほど離れた壁面に、縦2メートル、横1.5メートルほどの大きさの矩形のパネルが掛かっており、そのパネルが澄みわたった空のような青い色で塗られているのをいま私は知覚している」(cf. 22/28)、と。ここで注目すべきは、パネルにまつわるこうした事実をSはあくまで非個人的な事実として知覚するのであって、自分(の目)にとってパネルが青いとは知覚しないという点である (22f./29)。

ハンフリーによれば、ある人が外界に位置する物体の色に関して抱く信念は、感覚様相上の差異が認められない可能性が十分にありうる。その証左になるものとして彼は、vOICeという装置⁽¹⁰⁾をとおしておこなわれる色の知覚を挙げる (24/30)。因みに、vOICeによる色の知覚がいかなるものであるかを想像してみれば明らかのように、青の感覚とは異なり、青の知覚それ自体がSに「情動的・興発的反應」を引き起こすことはない (cf. 25/31)。

1.6 「青すること」という経験をかたちづくる四つの構成要素

以上で、感覚と知覚に関する基本的論点はそのおおよそが出揃ったものと考えられるが、この段階にいたってハンフリーは、これまでの議論をあらためて振り返ってその要点を整理してみせる。それによれば、パネルを眺めるというSの経験を構成する要素として、以下の四点が挙げられることになる (26 f./32, 34)。

- (1) Sは青の感覚を抱く。
- (2) Sはこの青の感覚を抱いていることを感じる (意識する)。
- (3) Sはパネルが青だと知覚する。
- (4) Sは自らの「自己」を経験する。つまり、Sは(1)から(3)をしながら、自分自身を経験者として経験するのである。

ハンフリーの挙げるフレーゲの言葉⁽¹¹⁾にも端的に示されているように、一般に主体的経験があるところには必然的に主体が存在しなければならないと考えられており、またそう考えることにも一理あるわけだが、しかし真相は逆で、内なる世界の経験が人間の存在の証となっているとハンフリーは主張する (26/32f.)。すなわち、Sは自分が感覚を生み出すのとまさに同時に、感覚が自分を自分たらしめている、換言するならば、自己を存在せしめていると感するのである (26/33)。まさにその意味で(デカルトを捩って言うならば)「われ感ずる故にわれ在り (sentio ergo sum)」ということになる。

1.7 感覚と知覚に関する常識的理解

1.6に見たように、ハンフリーは視覚的経験を構成するものとして四つの要素を析出するのだが、これを承けて彼はあらためて感覚と知覚との関係の問題にする。

議論の端緒として彼は、その著『人間の知的能力に関する試論 (Essays on the Intellectual Powers of Man)』(1785)におけるトマス・リードの所論⁽¹²⁾に依拠して、感覚と知覚との関係に関する常識的理解の基本的枠組みを再構成して示すのであるが、それによれば感覚と知覚の間には以下のような連鎖関

係が認められることになる (42/51)。

- (1)外界の対象が感覚器官に刺激を送る。
- (2)Sは、この感覚刺激をもとに、その低次元の複製としてある感覚を生み出す。
- (3)Sは、その感覚を意識することで、その属性 (properties) を読み取る。
- (4)最後にSは、読み取った結果をもとにして、外界の事実を再構築する (reconstruct) ののであるが、この作業こそまさに外界の対象を知覚することに他ならない (なお、この段階は「無意識の推論 (unconscious inference)」にもとづく)。

ハンフリーは、後に見るように、感覚と知覚に関するこうした常識的理解を斥け、これに代わる新たなモデルを提示するのだが、この常識的理解は、少なくとも (感覚的) 知覚をおこなっている当事者意識のレベルでは、それ相応の説得力と妥当性を備えているものと見なされる。問題は、事の真相に照らすならばその妥当性が疑われるこの常識的理解が、なぜ当事者意識のレベルでは十分妥当なものに見えるのかという点にある。断定こそできないが、もしかしたらここに感覚と知覚をめぐる問題の核心が潜んでいるのかもしれない (cf. 59ff./68 ff.)。

1.8 盲視

1.7に見た、感覚と知覚をめぐる常識的理解を斥けるにあたって、そのもっとも強力な反証をなすとハンフリーが考えるのが、いわゆる「盲視 (blind-sight)」⁽¹³⁾の存在なのであるが (因みに、ハンフリーは盲視研究の第一人者でもある)、この特異な知覚様態を1.6に挙げた視覚的経験の構成要素に即して捉えるならば、盲視とは、感覚が発生せず、その結果感覚の意識も生じないが、外界の知覚は無事な状態であるということになる (52/61)。

ハンフリーが盲視状態を発見するきっかけとなったのは、外科手術によって後頭部の大脳皮質第一次視覚野 (V1)⁽¹⁴⁾を取り除かれた「ヘレン」という名の雌ザルの存在であったが、この盲視のサル「ヘレン」は、自分の目が見えるとはまったく信じていないように見受けられた (43f./52f.)。

一般に盲視患者は、自分が盲目だと信じており、何の視覚的感覚もないと報告するが、それでも、物の位置やかたち、さらには色さえ推測することができる (47/55)。このことから推断するに、盲視は一種の「無意識的視覚 (unconscious vision)」であると考えられる (47/55)。

盲視の存在は、視覚的知覚が必ずしも感覚をとまなう必要がないということを裏づける極めて強力な証拠となる (47/56)。すなわち感覚と知覚は、同一の出来事によって引き起こされるとはいえ、その出来事に対するそれぞれ別個の反応で、順番にはなく並行して起きるのであり、仮に両者の間に相互作用が認められるとしても、それはずっと後の段階になってからの話なのである (49f./58)。

1.9 感覚と知覚に関する代替モデル

盲視の存在をひとつの決定的な反証として、感覚と知覚との関係をめぐる従来の常識的理解を斥けるハンフリーは、これに代わるものとしてあらたなモデルを提出するのであるが、その概要は以下のとおりである (50f./58f.)。

- (1)外界の対象が感覚器官に刺激を送る。
- (2)Sは、それに対する能動的反応 (個人的な評価の反応 [personal evaluative response]) としてある感覚を生み出すが、この反応は刺激の複製となるべく仕組まれてはいない。しかし、特定の刺激に対するSの反応であるかぎりにおいて、その感覚は、物理的出来事として見たときその刺激がいかなるものであるかという点と、Sがそれについてどう感じているかという二つの点に関して豊かな情報を潜在的に含んでいる。
- (3)知覚にはこれとはまったく別個に、やはり刺激から始まる独自の経路がある。

あらためて言うまでもなく、このモデルの要点は、感覚と知覚との関係をめぐる常識的理解に見られるように、感覚と知覚とを同一経路における連鎖関係のもとに捉えるのではなく、感覚を知覚から切り離し、両者を相互に独立した別個の経路のうちに位置づける点にある。

1.10 感覚の存在意義

1.9に見たように、ハンフリーは感覚を知覚から切り離し、両者を別個の心的プロセスとして捉えるのであるが、そのとき感覚は何の役にも立たないたんなる「おまけ」のような存在に貶められてしまうのではなからうか。もしそうでないとするならば、感覚はいったい何の役に立っているというのだろうか。ここであらためて問題となるのは感覚の存在意義である。

感覚の存在意義を考えるための手がかりとしてハンフリーが取り上げるのは、1.8にも見た、知覚能力は備えながらも感覚を失った盲視患者に認められる諸特徴である。すなわち彼は、感覚を失った人間がいかなる状態に陥るかを見ることによって、逆算的に感覚の存在意義を探ろうとするのである (64 f./73f.)。

盲視患者が能くしないそのネガティブな特徴として、ハンフリーは以下の六点を挙げる (66-70/75-79)。

- (1)患者は自分が見えることを知らず、したがって、まるで盲視の能力が自分のものではないかのように振舞う。
- (2)患者はどうして見えているのかその理由を知らず、自分の能力を自分でも説明できないため、盲視を不合理 (unreasonable) なものであると感じる。
- (3)患者は自分が盲視していることを想像できず、「盲視した (blind-seen)」対象をどうしても簡単には思い出せない。すなわち患者は、そもそもそれを見ていることに自分が与り知らないと感じる対象は再現できないのである。
- (4)患者は、自分自身の経験にもとづいて、見る条件を他者に当てはめることができない。すなわち盲視は、他者に感情移入 (empathy) をしたり、シミュレーションによって他者の心を読み取ったりするための基盤を提供してくれないように思われる。
- (5)患者は自己の盲視能力の存在にまったく無関心であり、自分が盲視できるということに何ら感興も覚えなない。

(6)患者は自分のことを「自己 (Self)」が希薄化した存在であるとする。

盲視患者が示すこれらの特徴から逆算するならば、感覚の存在意義とは、主体と外界との個人的な相互作用 (personal interaction) を探知することで、自己の経験に、「現に」、「いま」、「ここで」、「自分が」、それに直接関与しているという生き生きとした現実感 (リアリティ) を与えることにありと考えられる (70/79)。

1.11 感覚経験のもつ五つの特性

ハンフリーは、感覚経験を「身体表現 (bodily expression)」の一種として捉えるのであるが⁽¹⁵⁾、その論証に当たって彼は、感覚経験からその五つの特性を析出し、それぞれの特性について身体表現との比較を試みる (81-84/91-94)。ここで取り上げられる感覚経験の五つの特性に関する記述は、本来の文脈を超えて、感覚をめぐるこれまでの議論に関する一種の総括をなしているとも見なされることから、本稿第一部の最後に、この感覚経験の五つの特性を列挙しておくことにしたい。

(1)所有権 (ownership)

感覚はつねにその主体のものであって、他の誰のものでもない。たとえばSが青の感覚を経験するとき、他ならぬSこそがまさにその感覚を所有していると言える。

(2)身体的所在 (bodily location)

感覚はつねに身体に関して指示的 (indexical) であり、主体の身体の特定位と結びついている。たとえばSは青の感覚を視野の特定位で経験する。

(3)現在性 (presentness)

感覚はつねに現在時制で、進行中で、未完了である。たとえばSが青の感覚を感じる時、その感覚はあくまでそのときだけのものに過ぎず、それ以前は存在せず、またSがそれを感じなくなれば消えてしまう。

(4)質の様相 (qualitative modality)

感覚はつねに、質的に異なる様相のうち、どれかひとつの感じ (feel) をもっている。どの様相も、

それぞれ特定の種類の感覚器官と結びついており、いわば独自の現象様式 (phenomenal style) をもっている。たとえばSの経験する青の感覚は、あくまで視覚的感覚としてあり、視覚器官と必然的に結びついている。

(5)現象的即時性 (phenomenal immediacy)

主体にとって感覚はつねに、現象的に即時的なものであり、上の(1)から(4)の特性は自己開示的 (self-disclosing) である。たとえばSが青の感覚を経験するとき、本人の印象は「いま私は、自分の目の、視野のこの部分で〈青している〉」というものであり、それが他ならぬ自分の目であるという事実 ((1)) や、Sの目の他ならぬこの部分であるという事実 ((2))、あるいは他のときではなくいままきに起きているという事実 ((3))、それが聴覚的な仕方や嗅覚的な仕方ではなく、視覚的な仕方で生起しているという事実 ((4)) に、Sは直接的かつ即時的に気づく。その理由はまさに、青の感覚の作り手であるSがこれらの事実を生み出しているからに他ならない。

2 感覚と美的知覚

以上『赤を見る』において開陳された感覚と知覚に関するハンフリーの所論を検討してきたのであるが、以下ではそこで得られた成果をもとに「美的知覚 (aesthetic perception)」について考察を繰り広げることにした。

まずは考察の手がかりとして、本稿1でおこなった想定を一部変更するかたちで、あらたな想定をおこなうことにする。それは、いまわれわれが目しているものが、青い色に塗られたたんなる矩形のパネルではなく、イヴ・クラインの《青のモノクローム Blue Monochrome》⁽¹⁶⁾と題された作品であるとの想定である (すでに御賢察のことと思われるが、実は、こうした想定を目論んで、ハンフリーの書名『赤を見る (Seeing Red)』の「赤」をあえて「青」に変え、本稿のタイトルを「青を見る (Seeing Blue)」としたわけである)。

2.1 青 (IKB) の感覚

われわれが目にしてはいるものが仮にクラインの《青のモノクローム》であったとしても、当然ながら、外界の対象についての知覚は成立しうる。すなわち、ある一定の空間的位置に、これこれの大きさとかたちをもった物体が存在し、それが青い色 (IKB)⁽¹⁷⁾に染まっているのをわれわれは知覚するのである。

しかしながら、いまわれわれが目にしてはいるものがたんなる「もの」(物理的対象)ではなく、《青のモノクローム》と題された一つの藝術作品(美的対象)であることを覚知するとき、自ずから外界の対象に対する知覚作用は意識の背景に退くことになる(もとより知覚作用が完全に停止してしまうわけではなく、それはあくまで副次的な位置にとどまるのである)。外界の対象に対する知覚作用が意識の背景に退くとき、これに代わって意識の前景に表れてくるのは、外界の対象が感覚器官としての視覚に与える刺激から生み出された青 (IKB) の感覚それ自体である。

この青 (IKB) の感覚について、1で検討したハンフリーの議論をもとにその諸特性をここであらためて確認しておくならば、その要点として以下の五つが挙げられる。

- (1)青 (IKB) の感覚はあくまで個人的事実にとどまる。
- (2)青 (IKB) の感覚は他に還元不可能な独自のクオリアを備えている。そしてそのかぎりにおいて、それは主観的事実であるということになる。
- (3)青 (IKB) の感覚はその主体Sのうちに種々の「情動的・興発的反応」を引き起こす⁽¹⁸⁾。
- (4)青 (IKB) の感覚をもつことは、刺激に対する能動的で一人称的な反応であり、その主体Sはこの感覚の能動的な作り手としてある。
- (5)青 (IKB) の感覚を意識することが、Sの主体性の核をなす。すなわち青 (IKB) の感覚は、「現に」、「いま」、「ここで」、「自分が」、外界と相互作用をしながら存在しているという生の実感をSにもたらすのである。

2.2 美的態度

上に述べたような、美的対象を前にして自ずから取られる意識の特異な構え、すなわち外界の対象に対する知覚作用を意識の背景に追いやり、それに代わって感覚それ自体を意識の前景に据えるという対象に対する特殊な関わり方を、ここでは「美的態度 (aesthetic attitude)」の一種として捉えることにする⁽¹⁹⁾。

この種の美的態度は、他の要因によるのではなく、主体がそう意図することでそれが選択される場合や、あるいはクオリア自体のもつ誘引力によってその選択がおこなわれる場合もたしかにありうるが⁽²⁰⁾、通例ではむしろ何らかの状況的文脈がその選択にあたって直接・間接に大きく与っているものと考えられる。

たとえば目下の想定、すなわちいまわれわれが目の前にしているものがイヴ・クラインの《青のモノクローム》であるとの想定のもとに、あらたに美的態度が選択されたとするならば、その選択を促したものは、われわれが目にしてしているものが青い色に塗られたたんなる矩形のパネルではなく、一種の藝術作品 (美的対象) であるとの先行理解であろうし、仮に《青のモノクローム》をニューヨークの近代美術館で実際に目にしているとするならば、さらに遡って、それは本作に藝術作品の候補としての身分を授与している美術館という制度であるということになる⁽²¹⁾ (因みに、これら種々の状況的文脈が最終的にそこに位置づけられる地平が「アートワールド」である⁽²²⁾)。

2.3 青 (IKB) の感覚の志向対象

常識的理解とは異なり、感覚と知覚が本来別個の経路を辿るものと見なすハンフリーのモデルにしたがうならば、感覚は「何かについて」のものではなく、したがってそれは志向対象を欠くことになるのだが、それでは他方一種の美的態度のもとに意識の前景に現れる感覚の場合はどうであろうか。ここでもまた感覚は一切の志向対象を欠くと言えるのだろうか。結論から述べるならば、たしかに特異な仕方によってではあるものの、ここでは感覚は志向対象

をもつと考えられる。

目下の想定に即してこの点について具体的に考えてみよう。

一種の美的態度のもとに青 (IKB) の感覚それ自体に意識が向けられるとき、この青 (IKB) がもつ独自のクオリアが感受されるにとどまらず、そのクオリアは、それとはまた別のもの (その完全な言語化はもとより不可能であるが、あえて言葉によってそのおおよその輪郭だけでも示すならば)、たとえば「空の色」や「海の色」として、あるいはより抽象的に「悲しみ」や「清澄さ」として受け取られることだろう (もとよりそれがいかなるものとして受け取られるかは各人各様であろうし、また同一人物であってさえその受け取り方がつねに固定しているとはかぎらない)。あるいは、仮に観者が本作およびその作者たるイヴ・クラインに関してしかるべき背景知識を備えているとするならば、彼/彼女は、この青 (IKB) を、たとえば「非物質性」、「自由に向けての精神の絶対的な解放」といった概念的枠組みに沿うかたちで受け取るかもしれない⁽²³⁾。

いまここに挙げた「空の青」、「海の青」、「悲しみ」、「清澄さ」、「非物質性」、「自由に向けての精神の絶対的な解放」といった言語表現によってそのおおよその輪郭が示されたもの (無論これ以外にも無数のものが挙げられようが) こそまさに、青 (IKB) の感覚の志向対象であると考えられる⁽²⁴⁾。

ここでとくに注意を促したいのは、感覚はそれ自体がその志向対象に対するいわば透明な媒体をなしているという点である。

先にも述べたように、ある特定の感覚がいかなる志向対象をもつかは、その主体に応じて、また同一主体であってもその時々で変わりうるのであるが、しかしながら、ある主体がいま現にある特定の感覚を感受している場面に限定するならば、当該感覚とその志向対象とは一義的な関係に立ち、したがって仮に当該感覚がいささかなりともその質を変じるとするならば、それに依じてその志向対象も異になることになる。たとえば IKB の感覚の志向対象は、同じ青でもウルトラマリンの感覚の志向対象とは異

なるのであり、逆に言うならば、IKBの感覚の志向対象が仮に「非物質性」という言語表現によってそのおおよその輪郭が示されるものであるとするならば、そうした志向対象を表象しうるのは唯一IKBの感覚のみであって、他のいかなる感覚もこれをよくしないのである。

感覚がその志向対象として透明な媒体をなすとは、まさにこうした事態を指している⁽²⁵⁾。

2.4 美的知覚

上に見たように、一種の美的態度のもとにもつぱら意識を向けられる感覚は、ある特異な仕方での志向対象をもつと言えるのであるが、そのときここにある種の知覚が成立しているものと考えられる。すなわち、ここでは透明な媒体としての感覚を介してその志向対象が知覚されるのである（具体的に言うならば、青〔IKB〕の感覚を介して、たとえば「非物質性」という言語表現によって漠然と指し示されているものが知覚されるのである）。

美的態度のもとに成立するこうした知覚をここでは「美的知覚 (aesthetic perception)」と名づけることにするが⁽²⁶⁾、外界の実在物を対象とする勝義での知覚とこの美的知覚との決定的な違いは、前者の対象となるのが現実の存在者であるのに対し、後者の対象があくまで「虚構的・想像上の存在者 (fictional-imaginary entity)」にとどまるという点にある。このように美的知覚は「虚構的・想像上の存在者」をその対象とするのであるが、まさにその意味で、美的知覚は「虚構世界 (fictional world)」を開示するものと言える。

虚構世界を開示する美的知覚のもつこうした特性は、実は、美的態度のもとで生起する、感覚とその志向対象との間の特異な関係性に起因するものと考えられる。

2.3にも述べたように、美的態度のもとでもつぱら意識が向けられる感覚はその志向対象に対する透明な媒体をなしているのだが、そのとき当該感覚とその志向対象の間には一種のトークン同一性⁽²⁷⁾が成立することになる。この同一性は、もとより現実のものではなく（クラインの青〔IKB〕が現実

海や空の色であったり、「非物質性」という言語表現によって漠然と指し示されているものであったりするわけがない）、あたかも当該感覚がその志向対象であるかのように仮構する (imagine) ことによってはじめて成立しうるものであり、したがって、両者の同一性は、「as if 構文」で表現されるような仮想的様態 (subjunctive mode) にあると考えられる。

以上から明らかのように、虚構的・想像上の存在者をその対象とすることで虚構世界を開示するという美的知覚の特性は、感覚とその志向対象との仮想的同一化にもとづくものと言えるのである^{(28) (29)}。

美的知覚のもつこうした特性に応ずるかたちで、美的知覚をおこなっている際に、その主体は、たとえば以下に示すような種々の信念を顕在的もしくは潜在的な仕方でもつこととなる。

- (1)自分はいまある感覚（青〔IKB〕の感覚）を感受しているという信念。
- (2)その感覚をとおして自分はいま何らかの対象（たとえば、空や海の色、あるいは「非物質性」や「自由に向けての精神の絶対的な解放」といったもの）を知覚しているという信念。
- (3)自分はいま当該感覚の原因をなす外界に位置する実在物（青〔IKB〕で染め上げられた矩形のパネル）を知覚しているという信念。
- (4)自分がいま感受している感覚は、紛れもなく現実のものであるという信念。
- (5)自分のいまおこなっている美的知覚の対象（たとえば、空や海の色、あるいは「非物質性」や「自由に向けての精神の絶対的な解放」といったもの）は、虚構的（想像的）存在者に過ぎないという信念。
- (6)したがって自分のいまおこなっている美的知覚は、それ自体が虚構的（想像的）な知覚に過ぎないという信念。
- (7)一方、自分がいま感じている感覚は、外界に現実存在する対象（すなわち、ある一定の空間的位置を占め、ある一定の大きさとかたちをもった物体）からの刺激に起因するという信念。
- (8)そして自分がいま現実にもつその実在物を知覚してい

るという信念。

(9)したがって自分のいまおこなっている知覚は、それ自体が現実的な知覚であるという信念。

これら九つの信念のうち、まずは(1)から(3)の信念について言うならば、(1)と(2)の信念が顕在化されるのに対し、(3)の信念はあくまで潜在的な状態にとどまるのだが、このことは、一種の美的態度のもとで感覚それ自体が意識の前景に立てられるのに対し、外界の対象に対する知覚作用は意識の背景に退けられることに対応するものと考えられる。

一方、存在様相に関わる(4)から(9)の信念⁽³⁰⁾も潜在的な状態にとどまることになるが、これらの信念は、ある事態が虚構的(想像的)である、換言するならば、それが非現実的であるという信念と、逆に、ある事態が現実的であるという信念とに大きく二分されることになる(美的知覚の起点をなす感覚に関する信念が後者に位置づけられる点は、とくに銘記しておく必要がある)。このことは、ある事態が虚構的(想像的)であるとの信念はあくまで別の事態が現実的であるという信念によって裏打ちされることではじめて可能になるということを示している。

2.5 仮象感情

2.1でも確認したように、ある感覚をもつとき、その感覚は主体のうちに種々様々な「情動的・興発的反応」を引き起こすことになるのだが、その感覚をもとに志向対象が仮想的に定立されるとき、その志向対象を認知的成分として先の「情動的・興発的反応」を核とする「感情(feeling)」があらたに生み出されることになる。

ある種の感性的反応を感情として規定するにあたってその決定的なメルクマールとなるのは、それが、たとえば「気分(mood)」⁽³¹⁾のような感性的反応とは異なり、必然的にその志向対象をもつとともに⁽³²⁾、その志向対象に関する認知的・評価的機能を有する⁽³³⁾点に存すると言えるのだが、美的知覚に随伴する感情にあっては、その志向対象が現実のものではなく、あくまで虚構的・想像上のものにとどまることから、ここでの感情を現実の志向対象をも

つ勝義での感情から区別し、これを「仮象感情(apparent feeling/Scheingefühl)」と名づけることにする。

以上の点をまとめるならば、美的知覚には仮象感情が随伴するということになる。

3 結び

以上われわれは、『赤を見る』において示された感覚と知覚をめぐるハンフリーの所論に関する検討を踏まえ、その延長線上で美的知覚について考察を繰り広げてきたのであるが、最後に本稿におけるこれまでの議論から導き出される重要な論点を簡条書きにまとめておくことにしたい。

(1)「美的感覚(aesthetic sensation)」といった美的知覚に特有の感覚は本来存在しない。

(2)感覚を意識することは、主体性の核をなす、換言するならば、「現に」、「いま」、「ここで」、「自分が」、外界と相互作用をしながら存在しているという実感を主体にもたらすのであるが、美的態度のもとでもっぱら感覚に意識が向けられるとき、主体はそうした生の実感をきわめて鮮明なかたちでもつことになる。

(3)美的態度のもとで仮想的に定立される感覚の志向対象を完全なかたちで言語化することはできない(このことは、感覚それ自体〔クオリア〕が言語化不可能であることに対応している)。

(4)そもそも美的知覚は、感覚それ自体に意識が向けられることによってはじめて可能となることから、美的知覚が開示する虚構世界をその主体は(2)に挙げた生の実感をもって生きることになる。

(5)美的知覚が開示する虚構世界は、それがあくまで非現実的な存在であるという信念によって裏打ちされることではじめて可能となる。

註

1) 進化生物学的な観点からおこなわれる感覚と知覚に関するハンフリーの議論は、本書における白眉をなすと言っても過言ではない、きわめて

示唆に富むものなのだが、今回はこの点に関する言及はあえて差し控えることにする。

- 2) 『赤を見る』の背景に潜む基本的問題設定を見て取るにあたっては、ハンフリー [2004] 所収の「心身問題の解き方」(72ff.) および「感覚の私物化」(107ff.) が参考になる。
- 3) 『赤を見る』の頁数表記中、スラッシュで分けられた前の数字は原著の頁数を、また後の数字は邦訳の頁数をそれぞれ示す。
- 4) 精確には467~483nm。因みに、1nm は10億分の1メートル。cf. 日本色彩学会編 [1998]: 11.
- 5) クオリアに関する基本的理解に関しては、ローズ [2008]: 6f.を、またクオリアをめぐる哲学的問題の諸相については、信原 [2002] を参照されたい。
- 6) ハンフリーも指摘しているように (13/19)、ここでの「観念」は、言語哲学で言うところの「命題的態度 (propositional attitude)」に対応するものである。
- 7) 志向性の概念一般については、サール [1997] を参照されたい。因みに、志向性概念の要点を押さえるにはローズ [2008]: 7f.が簡便である。
- 8) このようにハンフリーは、クオリアに志向性を認めず、したがってクオリアを「志向的性質 (intentional quality)」としてではなく、「内在的性質 (intrinsic quality)」として捉えるのであるが、こうした立場は、いわゆる「クオリア志向説 (intentionalism of qualia)」と真っ向から対立することになる。因みに、「クオリア志向説」の立場を取る主要な論者にギルバート・ハーマンとフレッド・ドレッツキがいる。cf. ハーマン [2004]、ドレッツキ [2007]。
- 9) 色彩を見ることによってその観者のうちに引き起こされる「情動的・興発的反応」をハンフリーは、「美的態度 (aesthetic attitude)」と呼んでいるが、これは明らかにミスリーディングな用語法であると言わざるをえない。
- 10) vOICe とは、盲人が目の代わりに耳を使って見るのを助ける装置である。使用者は、ビデオカメラつきのヘルメットを被るが、そのヘルメットには光を音に変換するプログラムが組み込まれており、使用者はヘッドフォンをとおして音声イメージを受け取る。すなわちこの装置は、その場の光景をアナログの「音景」に置き換えるのである (cf. 56ff./64ff.)。
- 11) フレーゲ [1999]: 216.
- 12) Reid [1941]: 150-165. なおハンフリー [2004]: 88ff.では、ここで彼が依拠するリードの議論がより詳しく紹介されている。
- 13) 盲視とは、広義では、とりわけ霊長類において、一次視覚皮質 (primary visual [striate] cortex) が欠如しているにもかかわらず、視覚が残存していることを指す。視神経は、(視床を経由して) 網膜を視覚皮質に直接投影するだけでなく、脳の複数の場所と接続しているので、何らかの視覚的な機能が残ることはとくに驚くべきことではない。一方狭義では、視覚皮質に損傷を受けた人が視覚的弁別をおこなえるにもかかわらず、その弁別している刺激を「見ている」とは認識していない現象を指す (アイゼンク [1998]: 435f.)。なお、盲視に関する詳しい説明は、ハンフリー [1993]: 66ff.に見られる。
- 14) 大脳皮質第一次視覚野 (V1) については、コッホ [2006]: 135ff.を参照のこと。なお、視覚の神経生理学的なメカニズムに関しては、三浦 [2007]: 182ff.および高田 [1996]: 43ff.にきわめて簡明な説明が見られる。
- 15) ハンフリーが示す感覚に関するこうした理解は、それ自体としてきわめて興味深いものと言える。しかしながら、この論点を主題的に取り上げるためには、本稿における本来の問題設定の枠組みを変更し、その背景をなす感覚をめぐる彼の進化生物学上の仮説をも考察の射程に収めなければならないことから、遺憾ながら今回はこの問題に關説することは断念せざるをえない。
- 16) 1961年の作。合板に綿布、油彩、195.3×140.0

- cm。ニューヨークの近代美術館 (The Museum of Modern Art) 所蔵。
- 17) いわゆる「クラインの青」。これは、クラインが化学者たちの協力を得て開発した色彩 (乾燥顔料を透明な合成樹脂に浮かべることで、乾燥顔料が元来もっていたのと同じ明度と彩度を実現したもの) であり、1960年にIKB (International Klein Blue) として特許を取得した (とはいえ、商業的に生産されることはなかった)。クラインが「薔薇十字会」(17世紀以来、オカルト的教義にもとづき錬金術をおこなった秘密結社の流れを汲む思想、活動) の神秘主義的思想から学んだところでは、青は天空または精神の色であり、彼は、この青に「非物質的なものの描出、自由に向けての精神の絶対的な解放」の至高を見た (cf. ゴドフリー [2001]: 67f.)。
- 18) 色彩によって引き起こされる種々の「情動的・興発的反応」については、金子 [1990]: 167 ff., 小松 [2005] を参照のこと。
- 19) 「美的態度」の概念一般については以下を参照されたい。Fenner [1998], Reicher [2005]: 34-55, Goldman [2001]: 189-192, Iseminger [2003]。
- 20) 美的態度の選択要因をクオリア自体のもつ誘引に求めるにとどまらず、さらには感覚刺激の起点にまで遡ってこれを外界に位置するその対象に求めるとするならば、こうした立場は、美学上の実在論 (aesthetic realism) に通底することになろうし、逆にその要因をあくまで主体の側に求めるとするならば、それは反実在論 (anti-realism) に通底することになろう。なお、美学上の実在論および反実在論に関しては、Bender [2003] を参照のこと。
- 21) Cf. Dickie [1974]: 34.
- 22) Cf. Danto [2005], Dickie [1974].
- 23) 註 (17) における、IKB のもつ象徴的意味に関する記述を参照されたい。
- 24) ここでの志向対象は、ある特定の固定的な対象というよりは、むしろ何らかの方向性のもとに
- 緩やかな仕方で相互に関連づけられた流動的な表象群であると考えられる。
- 25) あえて一言蛇足めいた付言をしておくならば、その志向対象にとって不透明な媒体をなすもののひとつに言語がある (ただし、いわゆる「詩的言語」もしくは「詩的な言語使用」はそのかぎりではない)。たとえば、「青」、「blue」、「blau」、「bleu」、「blu」といった言語表現は、いずれも〈あお〉をその志向対象 (意味) としており、そのかぎりにおいて、両者の間に一義的な関係を認めることはできないのである。
- 26) 美的知覚の概念一般については、Korsmeyer [1998] を参照のこと。
- 27) トークン同一性とその対概念をなすタイプ同一性については、信原 [1999]: 6ff. を参照のこと。
- 28) 美的知覚のもつこうした構制は、“seeing as”、さらにはウォルハイムの言う“seeing in”の構制に通ずるものと考えられる。なお、“seeing as”に関しては、オルドリッチ [1968]: 30ff., Reicher [2005]: 134ff. を、また“seeing in”に関しては、Wollheim [1980]: 205-226, Wollheim [2004]: 400ff., Stecker [2005]: 152ff., Davis [2006]: 168ff., Goldman [2003]: 195ff. をそれぞれ参照のこと。
- 29) 以上の議論からも明らかなように、美的知覚にあっては 本稿1.8に見た「盲視」にあたる状態は本来存在しないことになる。なぜなら美的知覚の対象とは、あくまで感覚をもとにその仮想的同一化によって定立された対象に他ならないのであるから、感覚経験なしにその対象だけを知覚することは原理的に不可能だからである。
- 30) それが存在様相に関わるものであるかぎりにおいて、(4)から(9)の信念は、(1)から(3)の信念に対して二階の関係に立つものと言える。具体的に言うならば、(4)の信念は(1)に信念に対して、また(5)と(6)の信念は(2)の信念に対して、さらに(7)から(9)の信念は(3)の信念に対して、それぞれ二階の関係に立つ。

- 31) 「気分 (mood/Stimmung)」の概念についてもっとも洞察力に充ちた哲学的考察をおこなったのは、あらためて言うまでもなくハイデッガーであるが、ハイデッガー的理解のもとで「気分」の基本的性格を捉えるならば、気分とは、本質的に「世界-内-存在 (In-der-Welt-Sein)」としてある人間 (現存在 [Dasein]) が、その世界との関わりにおいて、自己がいかなる状態に置かれているかを示す「情態性 (Befindlichkeit)」にもとづくある種の感性的反応ということになろう。cf. Heidegger [1979]: 134ff.
- 32) 感情のもつ志向性に関しては、永井 [1986]: 28ff.を参照のこと。
- 33) 感情のもつ認知的・評価的機能に関しては、コーネリアス [1999]: 138ff., 高橋 [2002]: 89ff., 鈴木 [2007]: 36ff.を参照のこと。

参考文献

- アイゼンク、M.W.編 [1998]『認知心理学事典』野島久雄、重野純、半田智久訳 (原著1990年)、新曜社。
- オールドリッチ、ヴァージル・C [1968]『芸術の哲学』川野洋、徳丸吉彦訳 (原著1963年)、培風館。
- 金子隆芳 [1990]『色彩の心理学』岩波新書。
- コッホ、クリストフ [2006]『意識の探求—神経科学からのアプローチ』(上)(下)土屋尚嗣、金井良太訳 (原著2004年)、岩波書店。
- ゴドフリー、トニー [2001]『コンセプトチュアル・アート』木幡和枝訳 (原著1998年)、岩波書店。
- コーネリアス、ランドルフ・R [1999]『感情の科学—心理学は感情をどこまで理解できたか』斉藤勇、堀内久美子訳 (原著1996年)、誠信書房。
- 小松紘 [2005]「色彩と感情」、畑山俊輝編『感情心理学パースペクティブズ—感情の豊かな世界』北大路書房、132-140頁。
- サル、ジョン・R [1997]『志向性—心の哲学』坂本百大訳 (原著1983年)、誠信書房。
- 鈴木直人編 [2007]『感情心理学』朝倉書店。
- 高田明和 [1996]『感情の生理学—“こころ”をつくる仕組み』日経サイエンス社。
- 高橋雅延、谷口高士編 [2002]『感情と心理学—発達・生理・認知・社会・臨床の接点と新展開』北大路書房。
- ドレツキ、フレッド [2007]『心を自然化する』鈴木貴之訳 (原著1995年)、勁草書房。
- 永井均 [1986]『〈私〉のメタフィジックス』勁草書房。
- 日本色彩学会編 [1998]『新編 色彩科学ハンドブック 第2版』東京大学出版会。
- 信原幸弘 [1999]『心の現代哲学』勁草書房。
[2002]『意識の哲学—クオリア序説』岩波書店。
- ハーマン、ギルバート [2004]「経験の内在的質」鈴木貴之訳 (原著1990年)、信原幸弘編『シリーズ心の哲学III 翻訳編』勁草書房、85-120頁。
- ハンフリー、ニコラス [1993]『内なる目—意識の進化論』垂水雄二訳 (原著1986年)、紀伊國屋書店。
[2004]『喪失と獲得—進化心理学から見た心と体』垂水雄二訳 (原著2002年)、紀伊國屋書店。
- フレーゲ、ゴットロープ [1999]「思想—論理探求」野本和幸訳 (原著1918年)、黒田亘、野本和幸編『フレーゲ著作集4 哲学論集』勁草書房、203-235頁。
- 三浦佳世 [2007]『知覚と感性の心理学』岩波書店。
- ローズ、ディヴィッド [2008]『意識の脳内表現—心理学と哲学からのアプローチ』荻阪直行監訳 (原著2006年)、培風館。
- Bender, John W. [2003] “Aesthetic Realism 2.” In: Jerrold Levinson (ed.), *The Oxford Handbook of Aesthetics*. New York/Oxford: Oxford University Press, pp.80-98.
- Budd, Malcom [2004] “How Pictures Look.” In: D. Knowles and J. Skorupski, *Virtue and*

- Taste*. Oxford: Blackwell 1993, pp.154-175.
Reissued in: Peter Lamarque and Stein Haugom Olsen (eds.), *Aesthetics and the Philosophy of Art: The Analytic Tradition*. Oxford: Blackwell 2004, pp.383-395.
- Danto, Arthur [2005] "The Artworld." *Journal of Philosophy* 61.19 (October 15), pp.571-584.
Reissued in: James O. Young (ed.), *Aesthetics: Critical Concepts in Philosophy*. 4 vols. London/New York: Routledge 2005, Vol.2, pp.14-26.
- Davis, Stephen [2006] *The Philosophy of Art*. Oxford: Blackwell.
- Dickie, George [1974] *Art and the Aesthetic: An Institutional Analysis*. Ithaca/London: Cornell University Press.
- Fenner, David [1998] "Aesthetic Attitude." In: *Encyclopedia of Aesthetics*. New York /Oxford: Oxford University Press, Vol.1, pp.150-153.
- Goldman, Alan H. [2001] "The Aesthetic." In: Berys Gaut and Dominic McIver Lopes (eds.), *The Routledge Companion to Aesthetics*. London/New York: Routledge, pp.181-192.
[2003] "Representation in Art." In: Jerrold Levinson (ed.), *The Oxford Handbook of Aesthetics*. New York /Oxford: Oxford University Press, pp.192-210.
- Heidegger, Martin [1979] *Sein und Zeit*. 15te, an Hand der Gesamtausgabe durchgesehene Auflage mit dern Randbemerkungen aus dem Handexemplar des Autors im Anhang. Tübingen: Max Niemeyer.
- Humphrey, Nicholas [2006] *Seeing Red: A Study in Consciousness*. Cambridge/Massachusetts: Harvard University Press (『赤を見る—感覚の進化と意識の存在理由』柴田裕之訳、紀伊國屋書店、2006年) .
- Iseminger, Gary [2003] "Aesthetic Experience." In: Jerrold Levinson (ed.), *The Oxford Handbook of Aesthetics*. New York /Oxford: Oxford University Press, pp.99-116.
- Korsmeyer, Carolyn [1998] "Aesthetics of Perception". In: *Encyclopedia of Aesthetics*. New York /Oxford: Oxford University Press, Vol. 3, pp.451-454.
- Reicher, Maria E. [2005] *Einführung in die philosophische Ästhetik*. Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft.
- Reid, Thomas [1941] *Essays on the Intellectual Powers of Man*. Edited and abridged by A.D. Woozley. London: Macmillan.
- Rollins, Mark [2002] "Pictorial Representation." In: Berys Gaut and Dominic McIver Lopes (eds.), *The Routledge Companion to Aesthetics*. London/New York: Routledge, pp.297-312.
- Sibley, Frank [2001] "Colours." *Proceedings of the Aristotelian Society* 68 (1967-8). Reissued in: John Benson, Betty Redfern and Jeremy Roxbee Cox (eds.) *Approach to Aesthetics: Collected Papers on Philosophical Aesthetics*. New York /Oxford: Oxford University Press 2001, pp.54-70.
- Stecker, Robert [2005] *Aesthetics and the Philosophy of Art*. Oxford: Rowman & Littlefield Publishers.
- Walton, Kendall L. [2004] "Are Representations Symbols?" *The Monist* 58 : 2 (1974), pp.236-254. Reissued in: Peter Lamarque and Stein Haugom Olsen (eds.), *Aesthetics and the Philosophy of Art: The Analytic Tradition*. Oxford: Blackwell 2004, pp.349-358.
- Wollheim, Richard [1980] "Seeing-as, Seeing-in, and Pictorial Representation." In: *Art and its Objects*. 2nd edn. Cambridge: Cambridge University Press, pp.205-226.
[2004] "On Pictorial Representation." *Journal of Aesthetics and Art Criticism* 56 :

3 (Summer 1998), pp.217-26. Reissued in:
Peter Lamarque and Stein Haugom Olsen
(eds.), *Aesthetics and the Philosophy of Art:
The Analytic Tradition*. Oxford: Blackwell

2004, pp.396-405.

本稿は、東北芸術文化学会第50回例会（2008年5月3日）における研究発表にもとづくものである。